

## 「武州鉢形城」から「黒い雨」へ

田 辺 健 二

井伏鱒二が、戦後の代表作、あるいは六十年に垂んとするその文業の到達点を示すともいふべき傑作「黒い雨」を完成させたのは、昭和四十一年九月のことであった。井伏満六十八歳の時である。その意味で、昭和四十一年は、井伏にとって一つの重大なエポックを画する年であったと言つことができる。一方、昭和三十六年はといえば、「黒い雨」の先行作品として注目されている「武州鉢形城」を発表した年である。従つて、昭和三十六年から四十一年にかけての井伏の文学活動は、「武州鉢形城」の実験を経て、「黒い雨」を完成させたものとして概括することができるであらう。表題の所以である。

ところで、この時期のわが国の社会情勢はどのようなものであったかを一瞥しておく必要を感じる。昭和三十五年は、言うまでもなく、戦後日本の最大の節目、六十年反安保闘争の高揚と挫折の年である。この年、日本は、敗戦に次ぐ大きな曲り角を曲つた。その後は、いわゆる高度経済成長政策のもとでの「繁栄と安定」の時期を迎えることになる。小田切秀雄氏の言うように、**「日本経済の高度成長、巨額な設備投資、所得倍増宣伝、消費景気等々という経済的繁栄の気分、およびそれと結びついた安定ムード」**（『文芸年鑑』昭和三十七年版「概観」）が続いた時代である。それを象徴するように、東海道新幹線が開通し（三九・一〇）、東京オリンピックが開催された（同）。しかし、その「繁栄と安定」の時代も、四十二年になると驕りとひずみが見え始め、四十三・四年には、日大・東大の闘争を先駆けとする大学闘争の火が全国に燃え広がった。それは、日本の教育体制、戦後民主主義、独占資本主義など、戦後の日本の文化の総体の問い直しと改変を要求する、きわめてラジカルで巨大な文化運動に発展した。そして、闘争は単に大学に止まらず、広汎な市民運動、公害反対闘争、労働運動へと広がり、国民各層に大きな動揺と混乱とを与えた。これは、四十五年の七十年安保再改訂反対闘争の、形を変えた先取りとも見られなくはなかった。しかし、この、六十年反安保闘争の高揚にも匹敵する巨大な文化運動も、権力側の力による押え

込みが効を奏して、四十四年にはほとんど終息するに至つた。

このように見てくると、昭和三十六年から四十一年にかけての六年間は、戦後の日本の政治・経済・社会情勢の最も安定していた時代、また他面から言えば、三十五年の反安保闘争の高揚と、四十三・四年の大学闘争の全国的広がりとの谷間、学生・市民運動の挫折と沈滞の時代ということになる。

では、この時期、井伏はどのように時代と係わつて生きてきたのか、ということになると、彼の年譜を見る限り、積極的な係わりを持つことはなかったと思わざるをえない。時事的な発言は全く見当らないのである。数種の年譜と全集だけしか見ていないので厳密は期しがたいのだが、彼のこれまでの生き方を知っている我々には、この時期にも、またこの前後の大きな動乱の時期にも、井伏は時事的発言をしていないだろうと判断して大過あるまいと思われる。今は、事の是非を言うのではなく、井伏は元来そういう人であり、この時期もまた、井伏らしく生きたということを確認しておけばよい。しかし、井伏が時事的発言をしていないからといって、彼を時勢に無関心な作家だと判断するのは早計にすぎるのである。私には、彼は見かけとは真腹に、きわめて時勢に関心の深い作家のように思われるのである。今はそれを証明する準備はないが、彼の小説や随筆を読んでみると、そういう発言はほとんどないにもかかわらず、どうもそれらしい気配があるのである。岩屋に閉じ込められた山椒魚はその入口から外の現実をきわめて熱心に視ているのである。それはともかく、この時期の井伏は、一見時勢には全く係わりのないような作品を、かなり精力的に書き続け、「黒い雨」をも完成させるのである。

では、次に、この六年間における井伏の文学活動を概観しておきたい。

### 二

大越嘉七氏作成の「井伏鱒二作品年譜」〔法政大学出版局刊「井伏鱒二の文学」所載〕によれば、昭和三十六年から四十一年までの六年間に発表された井伏の作品は、総数六十九編である。その内訳は、この「年譜」や米田清一氏編集の筑

摩書房版『井伏鱒二全集』の分類等に従えば、小説十八編、随筆等三十六編、全集未収録作品が十五編となっている。以下の考察は、全集収録作品だけをその対象としたものであることを、はじめにおことわりしておきたい。従って、対象とした作品は、全集未収録作品十五編を除いた五十四編である。

元来、井伏の作品では、小説と随筆類の境界がはっきりしないのだが、この時期の作品のうち、筑摩書房版全集の中で小説として分類されている十八編の作品も、そのほとんどが随筆的な作品である。井伏その人、あるいはそれらしき人物が、△私Vとして登場して、その△私Vのいろいろな見聞を書き連らねたものが大半を占めている。たとえば、「戦死・戦病死」が小説として分類され、「南方ぼけの頃」が随筆類として分類されているのだが、両者はいずれも井伏の徴用時代の見聞を記したものであって、その書き方にも特に顕著な違いはないように思われる。両者を分ける基準は何か、井伏自身がどう区別して書いたのかを今は詳かにしないのだが、ここでは全集の分類に従っておく。

全集において、小説として載せられているのは、次の十八編である。「南島風土記」(昭36・1)「野犬」(同・9)「故篠原陸軍中尉」(昭37・10)「表札」(同)「誕生日」(昭38・2)「戦死・戦病死」(同・4)「つかぬことを」(同・5)「片割草紙」(同・8)「コタツ花」(同・11)「カラス」(昭39・1)「茅ノ島所見」(同・5)「笠雲」(同・6)「先輩」(同・9)「柴芽谷部落」(昭40・1)「姪の結婚」(同、後に「黒い雨」と改題)「上脇進の口述」(同・7)

これらの小説を、主要な素材によって分類してみると、およそ次のようになる。(一作品に二つの主要素材が採用されているような場合には、二作品として扱うという要領で数えたので、延べ作品数は十八より多くなっている。

- 一 戦争に関するもの——8
  - 1 太平洋戦争に関するもの——6
    - イ 徴用のことが中心になっているもの——1
    - ロ 徴用が中心になってくるもの——2
    - ハ 原爆が中心になっているもの——1
    - ニ 原爆が出てくるもの——1
    - ホ 南方での体験談——1
  - 2 太平洋戦争以外の戦争に関するもの——2
- イ 日露戦争に関するもの——1

- ロ 戦国時代の合戦を描いたもの——1
- 二 釣りに関するもの——7

- 1 釣りの話を中心になっているもの——2
- 2 釣りの話が出てくるもの——5

- 三 人物記——2

- 四 その他——選挙や見合の話、闘牛、野犬、カラス、雲、表札、無心状、柿の木を質草にした話などが主要な素材になっている作品が各一編ずつある。

こうしてみると、戦争と釣りの話が他を圧して多いことがわかる。この時期の井伏の関心の一端がここに表われているとみてよいのではあるまいか。勿論それ以外のこと、たとえば時勢の動きなどに関心が向いていなかったなどとは言えないが、少くとも作品に表われている限りの主要な関心はここにあったと言ってもよいであろう。その内、釣りについては、井伏のいつも採り上げる素材ではあるし、今特に論じる意欲を持たないのでここでは扱わないことにしたい。釣りは井伏にとっての心身の健康法や、あるいは老荘的境地への参入を目指したものかもしれないが、今は触れないでおく。従って、本稿では、井伏の戦争ものについて考察を進めていきたいと思う。が、その前に随筆類三十編についても一瞥しておきたい。数が多いので一編一編の題名は挙げないで、小説の場合と同様の方法で分類してみた。

- 一 建築・美術工芸品について——19
    - 1 陶器の話——8
    - 2 建築・庭について——5
    - 3 神社の宝物について——3
    - 4 臼・ナメシ革・経木真田について——各1
  - 二 旅の記——11
  - 三 人物印象記——11
  - 四 釣りの話——4
  - 五 日記(こまごました日常の話)——3
  - 六 徴用について——2
  - 七 歴史的な話——2
  - 八 園芸的なこと——2
  - 九 その他(易・物忘れ・直木賞など)——各1
- この中でまず目につくのは、建築・美術工芸品などに寄せる関心の深さである。

る。これらに対する井伏の関心は、△祖父ゆずり▽と本人も言っているように、ごく初期の文章からも窺われる。最近作「海揚り」もその表われである。次に多いのが、旅の記である。井伏はまた旅好きの作家でもあるようで、小説にも、「さざなみ軍記」「集金旅行」「ジョン万次郎漂流記」「漂流民宇三郎」などの漂流や旅を素材にしたものがあり、紀行文でも、「南航大概記」「七つの街道」「取材旅行」などがある。この時期の旅の記のうちの六編は、のちに『取材旅行』に収められたものである。井伏の旅は、取材のためであったり、骨董品を捜すためであったり、釣りのためであったりというふうには、目的は様々だが、かなり精力的に日本各地を歩き回っているようである。しかし、外国には、徴用の時を除いては出掛けていないようである。備後の片田舎の中地主の次男として生まれ育った井伏にとって、旅は宿命づけられたものであったのかもしれない。それだけに、逆に故里の田舎を愛惜する情もまた強かったものと考えられる。次に多いのが、人物印象記である。井伏の人物印象記の代表作としては、「風貌・姿勢」があるが、この時期の小説にも二編、随筆類の中には十一編が数えられる。温かくて同時に辛辣な目で、対象人物の本質を見事に描き出している。井伏得意の一分野と言うべきであろう。それ以外では、釣りの話が四編、徴用についてが二編あるが、他の時期に比べて特に多いというわけではない。

以上のように、この時期の小説・随筆類を概観するとき、私にはやはり時事的発言が一つもないことに奇異の念を抱かざるをえない。他の時期の年譜を見ても事情は同じことのようにある。他の作家はどうなのか。時勢に全く関心のない作家ならいざ知らず、先に述べたように井伏は社会的関心のむしろ強い作家のように思われる。井伏はなぜ時事的発言をしないのか。今はそれを明らかにする余裕を持たないが、一つには、評論家でもない自分が軽々に時勢に挿さすようなことをすべきではないという節度を守っているせいかもしれない。それはともかくとして、この昭和三十六年から四十一年にかけての時期における井伏の最も注目すべき仕事は、何といっても「黒い雨」の完成であろう。そこで次に、△戦争もの▽のVの集大成として「黒い雨」が完成する過程について考察してみたい。

### 三

先の分類に従えば、この時期の井伏における△戦争もの▽には次の作品が数えられる。小説では、「南島風土記」「武州鉢形城」「故籙原陸軍中尉」「誕生日」「戦死・戦病死」「片割草紙」「煙の結婚」(以下「黒い雨」と記す)の七

編、随筆類では、「亡友中村地平」(昭38・5)、「南方ぼけの頃」(同・6)の二編である。この内、井伏自身の徴用中の体験談が採用されているのは、「誕生日」「戦死・戦病死」「片割草紙」「亡友中村地平」「南方ぼけの頃」の五編である。「南島風土記」は、戦時中ニューギニア方面に通訳として従軍した人の体験談という設定になっている。「武州鉢形城」は、豊臣秀吉の小田原攻めの一環である鉢形城落城記である。「故籙原陸軍中尉」は、初出のとき副題に△「寄生木」のダイジェスト篇▽と記されていたもので、徳富蘆花の作品「寄生木」の主人公に対する井伏流の批評文ともいえるべきものである。そして、原爆について書かれているのが、「片割草紙」と「黒い雨」である。

「黒い雨」の先行作品としては、これまで「カキツバタ」(昭26・6)がしばしば挙げられてきた。広島で被爆し、福山に逃げ帰った娘が、そこでもまた焼夷弾爆撃を受けて、錯乱のあまりかきつばたの狂い咲く池に身を投げて死んでしまうという話である。原子爆弾が、単に人間を破壊させるだけでなく、百キロ以上も離れた所にあるかきつばたをも狂い咲かせるのかという恐怖感を与えて、無意味な短編となっているが、勿論これは原爆の全体に迫ろうとしたものではない。そして、今一つ原爆のことを採り上げたのが前述の「片割草紙」である。これは、△書かうかと思つて書きそびれた話▽を三つ並べたもので、原爆のことは最後に書き留められている。「黒い雨」の原資料を提供した備後小島町の重松さんの原爆体験談をもとにして書いたものである。ここに採り上げられた挿話にはまさしく「黒い雨」の先行作品と言える。

一方、「黒い雨」の先行作品として「武州鉢形城」を挙げるいくつかの説がある。次にその代表的な三氏の説を挙げる。

まず、松本鶴雄氏は、『井伏燭二論』(冬樹社 昭53・5)の中で、「『黒い雨』は形式、内容ともに『武州鉢形城』の延長上にある作品である。」と述べて、続いて、

まず、形式上から見ると『武州鉢形城』では前章に述べたように、作者が対象の事実を観察し、それを一応もつともらしく、資料に嚮造し、在来の資料とつきまぜて使用しているが、『黒い雨』の方法もまったく同じなのだ。こちらでは、いわゆる「緩急式」という矢須子の日記と重松の「被爆日記」がその役目を担っている。(七章『黒い雨』論・序 一七九頁)

と述べている。そして、内容的な面については、

また、その事はモチーフについても同様である。この『黒い雨』にはいくつかのモチーフはある。しかし、その中でも戦争が持っている残酷さは淡々とした語り口であっても作者が終始一貫して告発している、その点でも『武州鉢形城』とまったく同じ低音ながらも、その口吻においても同質といえる。(同前 一八二頁)

次に浦田佑氏は、井伏の小説における重層構成が、その初期からのかなり顕著な構成意識だということ指摘した後で次のように述べている。

「武州鉢形城」の重層は、長い年月を隔てた二つの時代を結ぶという形の重層だが、これと同形のもは、いまあげた表の中でいえばまず「二つの話」に表われてくる。「二つの話」は第二次大戦末期疎開の時代と秀吉の時代を結ぶものだが、この結び方などは、同小説にふれた河上徹太郎の解説などにも、強引で不自然、とされているが、「武州鉢形城」にはこの強引さも不自然さもない。これはすでに述べた『鉄砲玉』の効果が絶大だからであり、この鉄砲玉は数百年を越えた時代を見事に重層させたのである。これに続くのが「黒い雨」だが「黒い雨」の隔てられた数年の時代は、『古い日記』を『清書』し直すということで、これまた無理なく重層されている。そういう意味で、「二つの話」「武州鉢形城」「黒い雨」の三作は、戦後井伏文学の重層の実験的手法を見ていく上で、核となる重要作品であるということができ、「武州鉢形城」自体の価値の一半もまたそういうところに存するというべきであろう。(『私注・井伏鱒二』Ⅵ「武州鉢形城」の制作過程 二四八頁 明治書院 昭56・1)

今一つは、大越嘉七氏の意見である。

『さざなみ軍記』以来の記録や手記、あるいは日記形式を用いた歴史物や漂流記物、加えて『集金旅行』から『駅前旅館』『珍品堂主人』に至る、作者の目の代理人的な主人公による作品世界の構成、これら井伏文学が積み重ねてきた方法が『武州鉢形城』の実験を経て『黒い雨』に集大成されているとみることができる。(『井伏鱒二の文学』所収『黒い雨』論——原爆文学とリアリズム—— 一二八頁 法政大学出版局 一九八〇年九月)

以上三氏の見解は、「黒い雨」を「武州鉢形城」の延長上にある作品とみることでほぼ完全に一致している。二つの作品に共通するものとして、形式面では、その重層構成(湧出)、虚実様々の文献のおりませ(松本・湧田・大越)、作者

の目の代理人たる主人公の設定(大越)、内容面では、戦争の残酷さの告発というモチーフ(大越)というように、多少の出入りはあるけれども、それらは決して相退け合うものではない。基本的なところで両者が同系列の作品であることを三氏ともに指摘していることに変わりはない。そして、私もまたこれら三氏の見解に賛同するものである。「武州鉢形城」は間違いなく「黒い雨」の先行作品であることを確認しておきたい。さて、その上で、私はこれら三氏の見解にさらに一つの私見を付け加えたいと思う。それは、「故篠原陸軍中尉」の位置についてである。この、昭和三十六年から四十一年にかけての時期の代表作が「武州鉢形城」であり「黒い雨」であることに疑いはないが、昭和三十七年に書かれた「故篠原陸軍中尉」もまたこれらの作品系列に入る重要な作品であると思うのだが、前記三氏をはじめとして、この作品を論じている人は、管見の範囲ではないのである。そこで、前記三氏の説をふまえて、私なりにこの作品の位置づけを試みたいと思うのである。

#### 四

「故篠原陸軍中尉」は、昭和三十七年十月の『新潮』に一括掲載された、四百字詰原稿用紙にして百五十枚程度の作品である。初出のとき、「A「寄生木」のダイジェスト篇V」という副題が付けられていたが、これは単に徳富蘆花の作品「寄生木」のAダイジェスト篇Vというようなものではなく、この作品の主人公、あるいはそのモデルについての批評文ともいえるべきものである。「寄生木」は、陸中(岩手県)宮古の人、小笠原善平(作中では篠原良平)の手記を蘆花がまとめた長編小説である。(蘆花自身は、A此が所謂小説であるかはもとより疑問である。Vと述べている。)乃木大将の恩顧によって、一介の山出し少年から陸軍中尉にまで出世した、明治の一軍人の半生記、いや、その短かすぎる生涯の記録である。井伏も言うように入すいぶんひたむきに書いた人生記録Vである。井伏によれば、この作品は当時の若い読者に大いに人気があり、A「寄生木」を読まない女学生は、女学生の恥だとされてきたらるである。Vということである。その作品を、この時期の井伏がなぜ採り上げたのか。その辺りからまず考えてみたい。

井伏が「寄生木」を採り上げるきっかけになったのは、おそらく「故篠原陸軍中尉」に出てくる、小笠原善平の友人、中野大和町の大場弥平氏との出会いであったらう。この人物が実在の人かどうかは未詳だが、どうも実在の人らしく思われる。その名前や状況はともかく、この善平の友人との出会いがなければ、こ

の作品は成立しなかったのではないかと思われるからである。井伏がその友人に善平の書簡を見せられ、彼の人となり聞き、五十年ぶりに「寄生木」を再読したというのは事実であろうと思われる。再読してみても、井伏が感じたのは、八二十八歳で自決した主人公の陸軍中尉篠原良平の生涯は、偶然ではあつたにしても日本の謂はゆる軍部の宿運を暗示してゐるのではなかつたか。Vという思いであつた。これは注目すべき発言である。明治の一軍人の生涯が、日本の軍部の宿運を暗示しているという指摘は実に興味深い。ここに、この作品のモチーフがあるものと考えられる。「還洋隊長」(附25)において、軍国主義の愚劣と戦争の悲惨を見事に描き上げた井伏は、この「故篠原陸軍中尉」で、篠原良平中尉の生涯を再検討することを通して、再び日本の軍部を告発し、さらに、これを讚美する風潮をいましめようとしたのだと思われる。そこで、井伏が、日本の軍部の宿運を暗示しているというのは、篠原良平こと小笠原善平の生涯のどんな点を指しているのか、をまず考えてみたい。井伏自身は、この点を明言してないので、確かなことは不明だが、私なりに推察してみたいと思う。

篠原良平の人となりについての記述は、「故篠原陸軍中尉」では、主としてその友人大場弥平氏の証言に依つており、これに井伏その人らしい語り手のA私Vと、これも井伏の分身らしい某雑誌記者の判断を付け加えて行われている。まず、大場氏の証言から、良平の人となりについての評言を列挙すると次のようになる。

- 一——短気・激情家・いつこく・一本気・変物・風変わり・身勝手・感激屋・一種の酔っぱらい・自尊心が強い
- 二——病身・臆病・細心・神経質・女性的・気がよわい・運動神経未発達
- 三——誠実・正直・一途・責任感が強い・義理堅い・心のきれいな男・下司なところが無い・人に憎まれぬ・豪放・からりとした面白い男・上品・雅量がある

そして、井伏の判断と思われるものは、A短気・一本気で個性・破滅型・頑迷・お天気屋・臆病Vなどの評言に表われている。これら二人の評言に表われた良平の性格は、随分と複雑で、中野好夫氏の言うように(『蘆花徳富健次郎』)、長所も短所も極端な形で併わせ持ったAまことに不思議な人物Vなのである。両者の見方を比べると、大場氏はやはり友人らしく、良平の短気でエキセントリックな点は認めながらも、終始良平を褒めたり弁護したりしているのが目につくのに対して、井伏の評言は一貫して辛辣である。それも当然で、この良平のような

性格は、井伏の最も嫌悪するところのものなのである。良平の風貌は、軍国主義の亡者たる還洋隊長岡崎悠一中尉や、井伏が徴用で南方へ運ばれて行く時の輸送指揮官で、「ぐづぐづ言ふ者はぶつた斬るぞ」と怒鳴った将校、マレーで井伏を直接怒鳴りつけた山下奉文將軍、あるいは「黒い雨」の中で、長靴の中に握飯を入れられる威張り返った陸軍中尉等々にどこか似通っている。権力の威光を笠に着て威張り返るA長靴男Vへの嫌悪と反発は井伏において徹底している。この良平中尉も日露戦争軍中、三度ばかり「ぶつた斬るぞ」と宣言して、一度などは本当に一人の部下に切りつけてもいる。多くの美点を持ちながら、かとなつたら激昂してしまつて何を仕出さすか分らないというこの陸軍中尉は、自らの最期をもその破滅型の性格によって自ら作り出してしまつたかのである。陸軍大学受験資格試験に好成绩をとりながら、先輩に受験の機会を与えるために一年間待つように言われて我慢がならず、官舎の柱を刀で切つたりした挙句、突然軍隊をやめて外国語学校に入学してしまふ。身内の者や大恩ある大木(乃木)將軍にも相談一つせずにである。この後は蘆花の影響もあつたようであるが、一旦走り出したらこの中尉は止まることを知らないのである。さらに、陸軍大学合格を機に結婚するという約束をしていた許婚者に、約束が果たせないからというので一方的に婚約破棄の宣言をしている。その後は、病気が重くなつたこともあつて帰郷し、間もなくピストル自殺を遂げてしまふのである。ほとんど、自ら好んで墓穴を掘り破滅していったと思えないような最期である。

井伏が、A日本の軍部の宿運を暗示Vしていると見たのは、こういう篠原中尉の生き様死に様ではなかつたか。身も心も弱かつた中尉が、一時の怒りに激昂して、前後の見境なく破滅へと突つ走る有様に、はしくも日本の軍部の宿運の写し絵、ないしは象徴を見たのではなからうか。そして、さらに言えば、それは単に篠原中尉や、日本の軍部のみならず、Aかくすればかくなるものと知りながら止むに止まれぬ大和魂Vというような歌に共感することの多いわが日本民族の心性にも通じるところがあるのではなからうか。井伏の危惧はその辺りにまで及んでいられるかもしれない。少くともこの作品は、「寄生木」の原手記を書いた小笠原善平のみならず、それを小説化した徳富蘆花や、それを讚美して読んだ若者達の熱にうかされた頭を幾許かは冷ます効果があつたのではなからうか。軍人や戦争を、どんなことがあつても讚美してはならないという井伏の決意が窺えるような作品である。ちなみに言えば、この作品で批判の対象になつてゐるのは、主人公良平のみでなく、良平の父や兄、篠原憲兵大佐や蘆花までもそうなのである。大

木將軍でさえも全面的には肯定されていない。また、良平が日露戦争従軍中、日本軍の旅順総攻撃を二〇三高地から見ることができ、△何と云ふ壯観ノ／＼と言っているのに対して、△その実、壯観だといふその眺望は、敵味方の無数の人間を瞬時に死骸に変化させる作用を持つてゐた筈だ。あとは見渡すかぎりの死骸である。いはゆる無言の非戦論ではなかつたか。▽と井伏は批判的に書いている。

以上のように見てくるとき、「故籐原陸軍中尉」が、内容面において明らかに「武州鉢形城」「黒い雨」の系列に属するものであることが分かるであろう。

では次に、形式面について考察してみよう。まず第一は、湧田氏の指摘する重層構成がこの「籐原陸軍中尉」にも用いられていることである。氏の指摘する、「二つの話」「武州鉢形城」「黒い雨」における、△長い年月を隔てた二つの時代を結びという形の重層▽は、この作品にも行われている。この作品における一つの時代は、言うまでもなく「寄生木」の時代、主人公籐原良平や作者徳富蘆花の生きている時代、明治の中期から後期にかけての時代である。そして、今一つの時代は、井伏その人と思われる語り手の△私▽が、大場弥平氏の証言を聞いている時代、戦後のある時期であることは間違いないがそれ以上は確定できない時代である。この二つの時代は、△私▽が「寄生木」を再読し、また大場氏から籐原中尉の人となりを知ることによって、中尉の生涯を再検討するという形で無理なく重層させられている。ただ、この作品の現在（△私▽のいる時代）は、「黒い雨」の場合のように特に重大な意味を持たせられていないので、重層構成が「黒い雨」ほどには有効ではないと言えるであろう。大場氏の証言も、「寄生木」の裏付けであったり、その補完であるにとどまっている。

次に、松本・湧田・大越の三氏が指摘している、虚実様々の文献のおりませという手法についても、同様にこの作品にも用いられている。この作品における第一の文献は言うまでもなく「寄生木」である。そして、今一つの文献として、△「籐原良平に関する大場弥平氏の談話」といふ未刊行の速記録▽なるものが用いられている。これは、△某雑誌記者との対談▽ということになっているが、どうも架空の文献のようである。第一、△未刊行の速記録▽というのがあるが、どうも、△某雑誌記者▽というのもくさい。これでは、その文献のありか突き止めようもないのである。これは、おそらく井伏流の架空の文献であって、大場氏に会って得られた証言をこういう形に仕立て直したのであろう。従って、△某雑誌記者▽というのが、この作品の語り手である△私▽、つまりは井伏その人ということになる。事実、この△記者▽の発言には、どうも井伏の発言くさい所がいく

つかあるのである。

記者——彼のごときは、ときたま東北人に見る破滅型の人ではないでせうか。（全集七〇頁）

記者——性格的に云つて、良平のお天気屋さんのところは曾祖母に似て、非常識で頭迷なところは父親に似てゐますね。破滅型のところは、ある種の次男三男の宿命なんですか。（同七〇頁）

こういう発言は、太宰治を念頭においた井伏その人の発言とも考えられよう。

記者——さう云へば、農村出身の者が都会に遊学してゐると、誰だつて家からの仕送りのしかたが、みみちいやうに思ふのが普通ですね。ことに長男が家督をついで、次男三男の場合にはですね。（同八七頁）

これはほとんど井伏自身の体験にもとづく実感がそのまま込められている発言のように思われる。五歳の時に父を失い、東京遊学時には、家督を継いでいた長兄に、つらい思いをして無心状を書かねばならなかった、農家の次男井伏の若い頃の苦い思いが甦っているようである。

「武州鉢形城」や「黒い雨」のように数多くの、虚実様々の文献資料を自在に利用しているわけではないが、この「故籐原陸軍中尉」も原理的には同様の手法で書かれていると言つてよいであろう。そして、それは先の△長い年月を隔てた二つの時代を結びという形の重層▽構成には、必然的な手法であると言つべきであろう。

第三に、大越氏の指摘する△作者の目的代理人的な主人公による作品世界の構成▽もまた同様にこの作品において用いられていることは、すでにこれまでの叙述によって明らかであろう。「武州鉢形城」の場合もそうであるが、「故籐原陸軍中尉」における語り手の△私▽は、ほとんど作者井伏蘆二その人と言つてもいいような人物である。このことは、最近作「海揚り」や「兼行寺の池」の場合も同様である。この△私▽は、井伏の小説にも登場してゐるし、随筆の中にも自在に出入りするばかりでなく、現実の井伏その人でもあるのである。この辺りに、井伏における、小説と随筆との区別の無さ、虚構と現実との地続き性の秘密があるのである。井伏にとっては、現実と虚構との境界などはどうでもよいことなのかもしれない。要は、作品が「文学」になつておればよいことなのだから。

以上の考察によつて、「故籐原陸軍中尉」が、内容的側面においても、形式的側面においても、「武州鉢形城」や「黒い雨」と同系列的な作品であることは明らかであろう。勿論、この作品が、構想の面で今一つ不十分であったり、オリジナリティに乏しい憾みがあったりして、井伏文学を代表する傑作とは言えないけれども、代表作「黒い雨」の完成に至る重要な一階梯として見逃せない一作であることを指摘しておきたい。